

マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』 Argonauts of the Western Pacific

[1922=1967]『西太平洋の遠洋航海者』 泉靖一・増田義郎編訳『世界の名著 (59) マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』中央公論社、所収

■ 原始的経済人という誤り

・経済学の教科書に書かれている「原始的経済人」は、楽天的な怠け者の自然児で、できるだけ労働と努力を避け、私利私欲を最小限の努力で求めるという像である。
→だが、トロブリアンド島人は、いっしょうけんめいに働く。忍耐強く、組織的な仕事を行なう。共同作業では、スピード、完全さ、持ち上げるものの目方をお互いに競争する。農耕は、必要量の二倍も生産する。「よき農耕民は、彼のなしうる労働量と、耕す畑の大きさそのものから特権を獲得する。『よき畑作り』『有能な畑作り』を意味するトクワイバグラという称号には、尊敬の念がこめられている。」「収穫のあと、すべての作物は…円錐形にきれいに積み上げられ、しばらくのあいだ展示される。一人ひとりの収穫は、このような各自の畑に展示されて批評を受ける。原住民たちは組を作って畑から畑へと歩き回り、できばえに感心したり、比較したり、ほめたりする。」「トロブリアンド島人は、たぶんに仕事自体のために働き、畑の外観や体裁が美的にみえるようにとずいぶん工夫する。彼らは第一に、欲求を満たしたいという願望に導かれて働くのではなくて、伝統の力、義務、呪術信仰、社会的野望、虚栄などの複雑な要因の組み合わせに導かれて働くのである。」(127-130)

■ クラ交換

- ・ソウラヴァ（貝の首飾り）は時計回り、ムワリ（貝の腕輪）は反時計回り。それぞれ短期間所有して、次に送る。限られた数の男たちが参加する。一度クラに入れば、ずっとクラに属する。(147)→パートナーシップとして終生の関係を築く。クラ仲間は、姻族か友人であり、きわめて仲がよい。(156-157)
- ・クラ交換と並んで、原住民は通常の変易を行なう。(148)
- ・遠征のための遠洋カヌーの建造、大規模な葬式など、クラのための予備的な活動、またはクラと結びついた活動がある。
- ・「彼らは、社会構造の全体的輪郭について、知識を持っていない。自分自身の動機は知っているし、個々の行為の目的や、それに該当する規則も知っているが、これらからどのように全体的制度が形作られるかという問題は、彼らの知能の範囲を越えている。／どன்றりこんな原住民でも、組織された大きな社会構造としてのクラについて明瞭な観念を持っていないし、ましてその社会的機能、意味合いといったものは分からない。……総合的な図式は、彼の頭の中にはない。彼は全体のなかにあるのであって、外からそっくりそれを見ることはできないのである。」(148)
- ・クラは、神話に根差し、伝統的な法に支えられ、呪術的な儀礼に取り囲まれたものである。その主要な取引は、すべて儀式をとめない、公的な性格をもち、一定の規則によって行なわれる。クラは、言語、文化、人種の違う何千という人々を、二人ずつ組ませ、共同関係にまとめあげている。それは、高度の相互信頼と商業道徳を必要としている。(150)
- ・クラ交換は、日常の装飾としては決して用いられない二つのものを、無限に繰り返して

交換することである。(151)重要な行事のときに身に付ける。(152)

- ・すぐれたクラ用品は、固有の名前を持ち、それをめぐる原住民の伝説には、歴史と物語がある。(154)

- ・儀礼用の宝物。誇示用品である。実用には向かないぶざまな品物である。(155)

- ・クラを一、二年以上は保有できない。欲が深いといって非難され、悪評を立てられる。しかし、この一時的所有のために大変な名声を得ることができ、彼は品物を誇示し、どのようにして入手したか、その後だれにあげるつもりかを語る。(159)

- ・クラが一周するには、二年から十年くらいかかる。(160)

- ・クラの宝物は、優秀さの尺度であるトロフィー、ないし優勝杯と似ている。(160)

- ・「お返しとしてもらった品物が等価でないとき、これを受け取った人は落胆し憤慨するが、これを救う方法はなく、相手に強要したり、すべての取引を停止することはできない。」(161)→ギヴ・アンド・テイクに関する諸規定という社会的な掟が、彼らの生来の私利私欲的傾向よりはるかに強い力を発揮している。有力者の主要なしるしは、富めることであり、富のしるしは気前のいいことである。実際、気前のよさは善の本質であるのに対して、けちは最大の悪である。(162)気前のいい男には、たくさんの品物が流れ込んでくる傾向にある。(163)

- ・返す品物がないときは、「バシ」という中間の贈り物を贈る。これは、主要な贈り物はまたの機会に支払うことを意味する。バシは善意のしるしである。(164)

- ・クラ交換には二種類のタイプがある。一つは、相当量の財宝がいちどきに交換される大海洋遠征隊の例である。もう一つは、島内交易で、品物が数マイル動くあいだに数人の手を経ることもしばしばある。(169)

- ・けっしてバーターではないので、交換物が同じ価値のものかどうか検討したり、値切ったりして、じかに交換を行なうことはない。(277)

- ・「宝は、与える方の側から渡されなければならない、受け取る側は、ほとんどそれに目もくれず、実際に自分の手で受け取ることはまずない。取引のエチケットによれば、贈物は、むぞうさに、やぶからぼうに、ほとんど怒ったような態度で与えられ、また受け取る方も、同様に冷淡な、侮蔑的な態度で受け取る。」(277)→おつきの位の低い者がそれを拾い上げる。(278)

- ・二つの贈物のあいだには、すくなくとも数分の間がおかれなければならない。(278)

- ・「クラ取引における等価の考え方は、たいそう強くはっきりしている。そして、受け取る側がヨティレ[お返しの贈物]に満足しないときには、それが皮切りの贈物として適当な『歯』[クドゥ]ではないとはげしく不平をならし、それは本当の『結婚』ではない、正しく『かみあって』いないといって怒るのである。」(282)→面と向かって怒るのではないが、遅かれ早かれその耳に達するだろう。結局、妖術師を雇って相手を呪うことになる。逆にクラ交換がうまくいく場合は、相手方が気前がいいためとは考えず、自分の呪術がきいたと考える。(285)

■ クラと貨幣

- ・貨幣もヴァイグアも圧縮された富の表現である。(332)

- ・ヴァイグアは、交換の媒介物となったり、価値の尺度となることはない。

・ヴァイグアは、交換されるという目的を持つ。それは、物々交換ではないし、たんなる贈物のやり取りともいえない。また交換の遊びでもない。それはまったく新しい型の交換である。(332-33)

・「たえず流通し交換することのできる価値ある品であって、その価値が、まさしくこの流通自体と流通の性格に由来している」(333)。

・価値を含んだものを何でも「貨幣」とか「通貨」と呼ぶことは間違っている。(340)

■ マリノフスキーの研究関心

・「多様な人間の生活様式をよるこんで味わうことよりも、もっと深く、もっと重要な、あるものの見方がある。それは、そのような知識を英知に変えたいという願望である。…われわれの最終目的は、われわれ自身の世界の見方をゆたかにし、深化させ、われわれ自身の性質を理解して、それを知的に、芸術的に洗練させることである。」(341)→未開人のものの見方に対して尊敬と真の理解を示すこと。自分の生まれた環境の狭苦しく閉ざされた慣習、信仰、偏見を捨てて、哲学的で啓蒙的な自己認識に達することが重要である。

モース「贈与論」 Essai sur le don[1923-24→1950=1973]『社会学と人類学 II』有地亨／伊藤昌司／山口俊夫訳、弘文堂、所収

序論 贈与、とくに贈り物の返礼をなすべき義務

・【問題】：「未開あるいは太古の社会類型において、贈り物を受けた場合に、その返礼を義務づける法的経済的規則はいかなるものであるか、贈られた物には、いかなる力があって、受贈者にその返礼をなさしめるのか。」(224)

■ 給付、贈与、ポトラッチ

・近代以前の「交換」の特徴＝「全体的給付組織(système des prestations totales)」：①相互に義務を負い、交換し、契約するのは個人ではなくて集団である。②彼らが交換するものは、財産や富、動産や不動産などの経済的に有用なものだけではない。それは、礼儀、饗宴、儀式、軍事的奉仕、婦女、子供、舞踏、祭礼、および市であって、取引はそういったものの契機の一つにすぎない。③この給付および反対給付は、贈り物や進物(シモツ)によってなされる。それは義務的なものであり、不履行の際には公私の闘争に導く。(226-27)

・【ポトラッチ(Potlatch)】：北米の北西沿岸のインディアン諸族にみられる莫大な財の贈与と破壊の儀礼。婚姻や誕生の機会に行われる。儀礼の主催者は、招待した人々に対して莫大な贈り物をする。贈り物を受け取った者は、今度は、別の機会に、今回贈り物くれた人物を招待し、もらったものと同等あるいはそれ以上の贈り物を返さなければならぬ。こうして、パートナー間では贈り物の交換合戦が際限なく繰り返されてゆく。ときには相手の前で自分の財を破壊したりもする。これは「競覇型の全体給付」である。

→贈り物の返礼を義務づけるメカニズムは何か。(229)

第一章 義務的贈答制と返礼の義務（ポリネシア）

■ 全体的給付——父方の財産と母方の財産（サモア島）

・【トンガ】「いわゆる財産とみなされるすべてのもの、富、権力、威信を与えるすべてのもの、交換の対象となりうる一切のもの、賠償の対象として使用されるものを指す。それは主として、財宝、護符、紋章、ごぞ、聖なる偶像であるし、ときには、伝統、祭祀、呪術の儀式でさえあった。」(235)→「護符財」という概念

■ 贈られた物の霊（マオリ族）

・【タオンガ】：贈り物のこと。それを受けた個人を殺すように祈りこまれる。したがって、返礼する義務を遵守しないときには、タオンガはその者を殺害する力を包蔵している。

(237-38)

・【ハウ】：物の霊。とくに森の霊や森の獲物の霊。タオンガは、その土地、森、産地のハウを宿している。このハウの力によって、贈り物の返礼が義務づけられる。(238-39)

→二つの社会システム：

①物の移転によって創設される法的紐帯。「マオリの法においては、物を通じて創設される法的紐帯は、物そのものが霊をもち、霊に従属している以上、霊と霊とのあいだの紐帯であるということが明瞭である。そこから、ある者に何かを与えることは自分自身の一部を与えることであるという結果が出てくる。」(240)

②義務的贈答制。「だれかから、なにかを貰うということは、その者の霊の一部を貰うことである。そのような物を保持しつづけることは危険であって、生命にかかわることである。」

■ 提供の義務と受容の義務

・三つの義務：贈り物を与える義務、受け取る義務、返礼する義務。

・「与えることを拒絶したり、あるいは招待することを怠るのは、受け取ることを拒絶すると同様に、戦いを宣するに等しい。」(243)

■ 人に対する贈与と神に対する贈与

・「人びとが契約を締結しなければならず、また人びとと契約を締結するために存在するといいうる重要な集団の一つは、死者の霊と神である。実際、かれらは地上の物と財産の真実の所有者である。すなわち、かれらと交換することがとくに必要であり、交換をしないことは非常に危険であった。しかし反対に、彼らと交換をするのはきわめて容易であり、また、もっとも安全であった。供犠の破壊の目的は、まさしく贈与であり、これには必ずお返しがある。アメリカ北西部およびアジア北東部のポトラッチのすべての形態はこの破壊の命題を含んでいる。人びとがその奴隷を殺害し、高価な油を燃やし、海に銅板を投じ、

また、豪華ゴウキョウな家屋に火を放つのは、たんに権力や富や無私無欲を誇示するためだけではない。それは、また同時に、精霊や神に供犠を捧げるためであるが、これらの精霊や神は、実際には、それらと同一の名称を有するとともに、それらと儀式を共同にする人間に化身して現れる。」(248)

→ポトラッチは、神との交換である。「売買の観念は、トラジア族の民事上ならびに商業上の慣習ではほとんど発達しなかったけれども、精霊や神から買得するという観念はかえって完全に定着している。」(249)→「汝が与えるがゆえに余は与える」(250)

・【喜捨】：「喜捨は、一方においては、贈与および財産についての道徳的観念と、他方では、供犠の観念との所産である。物惜しみすることなく与えることが義務である。なぜならば、ネメシスの女神[ギリシア神話の女神。人間の行為を監視し、その正邪に応じて幸不幸を与える神]は貧しき者と神のために、幸福と富とを有り余るほどもっていて、施しをしない者に仕返しをするからである。」(251)

第二章 このシステムの発展、気前のよさ・名誉・貨幣

■ 惜しみなく与える規則（アンダマン諸島）

・「なにびとも提供された贈り物を受けるのを自由に拒否することはできない。男子も女子もすべて、競って気前のよさを見せて、他の者に打ち勝とうと努める。だれにより高価な物をもっとも数多く与えうるかを張り合って、一種の競争が存在した。」(259)

■ 贈り物の交換の原則と、契機および強度（メラネシア）

・メラネシア人は、ポリネシア人以上にポトラッチを保存し、また、明瞭な貨幣観念を持っている。(261)

・【トロブリアンド諸島における「クラ」交換という巨大なポトラッチ】

・クラ（おそらく「環」という意味だろう——モース）という交換は、ギムワリと称される有用品の交換と区別される。ギムワリは、値切りあうが、クラ交換では雅量をもってなされる。(263)

・クラ交換における義務的贈答の対象は、ヴァイグアと呼ばれる貨幣の一種である。これには二種類ある。ムワリという腕輪と、スーラヴァという首飾りである。ムワリは、西から東へ、スーラヴァは東から西へと贈与される。

・「クラは、……給付と反対給付の広大なシステムのなかのもっとも儀式的な一時機をなすだけである。」「クラに際してのヴァイグアの交換そのものも、値踏み、謝礼の支払、懇請、たんなる礼儀、申し分のない歓待、冷遇、ひどい仕打ちにいたるまでの、変化に富んだ一連の交換のなかに組み入れられている。」①クラは、ギムワリ、すなわち普通の交換の機会であって、これは必ずしも確定した相手方とのあいだで行なわれるとは限らない。②クラの当事者には、連続した鎖のように、補助的な物の贈答と義務的な取引がなされる。クラそのものがこのようなことを必要なものとしている。→ヴァガ（最初の贈与）、引出物、餞別などがある。(270-71)

・遠征隊の成員間の競争：「彼らは相手の部族のなかで最良の相手方を探し求める。……

クラの創設が意図される共同関係は、当事者間に一種の氏族関係を設定する。それゆえ、相手を得るために、誘惑し、見栄を張らなければならない。身分を適当に考慮に入れながら、他の者より先に、あるいはうまく目的に達して、一番高価なものを交換する機会をより多く持たなければならない。競争、張り合い、見せかけ、権勢と利益の追求、これらすべてが行為の基礎にある契機である。」(271)

■ 北西部アメリカのインディアン

・物々交換は知られていない。(287)

・「彼らは春になると四散して、山地に狩猟や木の根、滋養分豊かな果実の採取に出かけ、また、河に鮭を捕獲しに行く。これに反して冬ともなれば、かれらは《町》と称せされる場所に集合し、この集合の全期間を通じて終始興奮した状態をつづける。そこでの生活は、興奮の連続であって、全部族と全部族、氏族と氏族、家族と家族とが始終相互に訪問しあうのである。それはいわば祭礼が継続的に繰り返されるのであり、その各々の祭礼そのものが相当長期にわたることもあった。」(288-89)

・「あるポトラッチでは、自分の持っている一切のものを消費して、何一つ残してはならない義務を負う。誰が一番の金持ちで、その富をもっとも派手に消費する者であるかをわれ先にと競い合うのである。対抗と競争とがすべての基礎である。地位は、……ポトラッチでも失われることがある。……ときには、物の受贈は問題ではなく、返してもらうことを望んでいないという態度を示すために、たんに物を破壊することがある。魚鱗ギョウや鯨油の樽をそっくり焼却するとか、家屋や数千枚もの毛布を焼き払うとか、あるいは、競争相手を圧倒し、《やりこめる》ために、非常に高価な銅板を破壊したり、水中に投げたりすることをも辞さない。このようにすれば、みずからの社会的地位ばかりでなく、その家族の社会的地位が高められるわけである。」(291-92)

・【贈与交換から物々交換への発展】：「贈与は必然的に信用の観念を生じさせる。発展は経済上の規則を、物々交換から現実売買へ、現実売買から信用取引へと移行せしめたのではない。贈られ、一定の期限の後に返される贈与システムの上に、一方では、以前には別々になっていた二つの時期を相互に接近させ、単純化することによって、物々交換が築かれ、他方では、売買——現実売買と信用取引——と貸借が築かれた。」(291)

■ ペルソナ=面子を賭ける

・「北西部アメリカにおいては、威信を失うことは魂を喪失することと同様である。……ポトラッチ、あるいは贈与の競技で失われるのは、真に《面子》であり、舞踏の仮面、すなわち精霊を化身し、紋章あるいはトーテムをつける権利であり、このように、賭けられたペルソナ=人格=仮面である。」(301)

・十分なお返しをしなければ、面子を失う。返礼の義務への制裁は、奴隷になることである(305)

■ 交換の対象物に潜む力

・「ポトラッチで交換される物の中には、贈り物を循環させようとする力、つまり、贈り物に対して与えられ、返されることを強制するある効力が存在する。」(313)

■ 名誉の貨幣

・紋章入の銅板は、ポトラッチの本質的な財産である。銅板は、それだけで特殊な信仰の対象でもある。(321)銅板は引きつける効能を持っていて、あたかも富が富を呼び、威信が名誉をもたらし、精霊の入身を誘い、よい縁組をもたらすように、他の銅板を引き寄せる。

(321-22)

・移転されるのは、財産であると同時に、富と幸運である。それらの物を通じて、地位は獲得される。なぜなら、人は富を獲得するがゆえに、かれらは精霊を得るからである。しかも、この精霊が今度は彼に乗り移り、英雄のように諸々の障害を克服できるようにする。

・【他者に負っているということ】：「物が与えられ、返されるのは、まさしく、《敬意》が相互にとり交わされるからである。しかしそればかりでなく、それは、物を与える場合に、人は自分自身を与えるからであり、人が自分——自分自身と彼の財産——を他人に《負っている》からである。」(323)

→財物の循環と権利や人の循環とが同一であること(328)

第四章 結論

■ 道徳上の結論

・「われわれの道徳や生活自体の相当な部分はずねに義務と自由とが混淆した贈答制の雰囲気そのものの中で停滞している。一切のものがもっぱら売買の点からだけ位置づけられていないのは、われわれにとって幸せである。……われわれの道徳はたんに商業上のものだけではない。われわれの間には、いまなお、過去の習俗を支持する人々や階層があるし、また、われわれのほとんどすべての者は、すくなくとも、一年の中のある時期、あるいはある機会には、それらの習俗に服するのである。」(371)

・「フランス社会保障に関するすべての立法およびすでに実現された国家社会主義は、次のような原理から生ずる。すなわち、労働者はその生命と労務を社会とその雇用主に捧げる。労働者が保険の事業に協力しなければならぬとすれば、かれの労務によって利益を得る者はたんに賃金を支払うだけで彼に対する貸し借りはなくなってしまうというのではない。社会を代表する国家そのものが、雇用主とともに、労働者の協力を得て、労働者の失業、疾病、老齢、死亡に対処する一定の生活保証をなす義務を負うのである。」(373-74)

・家族扶助金庫、強制失業保険、労働者の生活保障、→「すべてこれらの道徳や立法は社会変動に対応するのではなく、法への復帰に照応するものである。一方では、職業道徳や同業者組合の出現ないしは実現がみられる。……国家、市町村、公的保護施設、老人退職恩給公庫、貯金金庫、共済組合、雇用者団体、賃金労働者団体などの集団が、たとえばドイツやアルザス・ロレーヌの社会立法では、すべて一緒に結合されている。そして、フランスの社会保障においても、ほどなく、同様になるに違いない。それゆえ、われわれは集団の道徳に立ち返ろうとしているのである。」(374-75)

・【道徳実践】：①金持ちによる「高潔な消費」。聖餐（せいさん）式、共同会食など。

②社会保障制度の充実。協同組合や職業団体などの一切の法人への配慮。③投機や高利貸しの収益を制限する。④公然の物を与える喜び、鷹揚(ヤカ)にして雅趣のある消費の楽しみ、客礼、公私の祭礼の楽しみを発見する。

→こうして、「職業団体に人間性を与えて、それを完成させるべきである。これこそ、デュルケームがしばしば称揚した偉大な進歩の徴表となろう。」(376-77)

→義務的贈答による全体的給付システムは、「われわれが現代社会に進んで行ってもらいたいと念じている型とまさしく同じものである。」(377)

■ 経済社会学上および経済学上の結論

・巨額の剰余価値の蓄積がある。→浪費を伴う純粋消費のために用いられる。

・経済組織全般は宗教的要素で染め上げられている。貨幣は依然として呪術力を有し、氏族または個人に結びつけられている。経済活動は儀式と神話で浸透されている。

・「アリストテレスを踏襲するラテン系学者に従って、経済歴史学の見解では、これらの交換は分業の起源をなしている。これとは逆に、一切の種類のこれらの社会においては、物を循環させるのは効用以外の別個のものである。」(381)

・「われわれが使用してきた贈り物(*présent*)、進物(*cadeau*)、贈与(*don*)という用語そのものがまったく正確であるわけではなく、他に適当な用語が見当たらなかったからである。」
「マリノフスキー氏は、トロブリアンド島民のあいだで目撃した一切の取引を不純な動機と純粋な動機の観点から分類するために、真剣な努力を注いだ。かれは純粋な贈与と値踏みを伴う物々交換とのあいだに、それらを配列した。いずれにしてもこの分類は適当なものではない。」(382)

・「ヴァイグアは、……富であるとともに富の表象であり、交換や支払の手段であり、さらに、贈られるか、あるいは破壊されるべきものである。しかもそれは、それを使用する人に結びつけられた担保物であって、この担保物はその者を拘束する。しかし他方で、それがすでに貨幣の表象物として役立っている以上、あらたに他の貨幣を所有するためには、それを他に与えた方が利益になる。なぜなら、それらが再び貨幣をもたらす労務や商品に変えられた方がその者には結局得になるからである。」「富の純粋な破壊ですら、そこに見出されると考えられているような、利得に対する完全な無関心に対応するものではない。」(383)

・ポトラッチの利害関係：「酋長と配下とのあいだ、配下とその取巻き連とのあいだには、これらの贈り物によって、身分階層制が設けられる。与えるということは彼の優越性を示すことであり、また、彼がより偉大で、より高くあり、主人であることを示すことである。貰って何らお返しをしないとか、あるいはより多くのお返しをしないということは従属することであり、家来や召使いになること、小さくなること、より低い地位に落ちることである。」(384)→「これらで求められているものは、第一位になり、もっともすぐれていて、一番幸運に恵まれ、誰よりも強く、一番幸福になることであり、しかもいかにしてそのようになるかということである。」(385)

■ 利得の観念・経済人・エリート支配の保守主義

・「《利益》*intérêt*ということばそのものの語源は新しいのであって、それは簿記用語、

すなわち勘定簿上徴収すべき地代に対応する個所に記載されたラテン語の《interest》に由来する。きわめて享楽主義的な古代道徳では、追求されたのは幸福と快楽であって、物質的効用ではなかった。利得の観念と個人の観念が流布されて、原理の水準にまで高められるには、合理主義と商業主義の勝利が必要であった。個人主義的利益の観念の勝利はほぼマンデヴィル(1670-1733)とその著書『蜂の寓話』が現れた後からはじまるといって差し支えないだろう。」(386)

・「ごく最近になって、われわれの西欧社会は人間を《経済的動物》に変えてしまった。しかし、これまでのところでは、われわれのすべてがこのような存在になっているのではない。民衆の中でも、また、エリートの間でも、純粹の非合理的な消費が日常の普通事である。それはなおわれわれの貴族階級の若干の特徴でもある。」(386)

・「われわれとしては、最良の経済の方策は個人的需要の計算の中に求められるべきではないと考える。われわれは自分の富を増すことを望むかぎりにおいてさえ、有能な勘定方、すぐれた管理者となりながらも、生粋の利殖家とは異なったものであらねばならないと私は考える。個人の目的を純粹に追求することは全体の目的と平和に害があるだけでなく、全体の労働と喜びの律動、そして……個人自身にも有害である。」(387)

[メモ]モースの立場は、経済システムの分化を、エリート(貴族)の道徳的な実践によって制御するというある種の「保守主義」。

■ 一般社会学および倫理学上の結論

・これまで研究してきた諸事実はすべて、「全体社会事実」である。これらの一切の現象は法的、経済的、宗教的であると同時に、審美的、形態学的などでさえある。(391)それは諸制度の諸要素以上のもの、諸制度のシステム以上のものである。すなわち、「有機的統一体」、「全社会組織」である。(392)

・「諸種の社会は、社会、その下位集団や成員が、提供・受容・返礼を行なって、その相互関係の安定を保ちえた範囲において発展を遂げてきた。交易を開始しようとするためには、まずはじめに、武器を捨てることができなければならない。それがなされてはじめて、人びとは氏族間だけでなく、部族間、民族間および個人間で、物や人を首尾よく交換できたのである。人びとが相互に利益を作りだし、それを満たし、しかも、武力に訴える必要なくして、それを擁護することができるようになったのは、その後のことにすぎない。このようにして、氏族、部族、民族は相互に殺戮しあうことなくして、対抗し、相互に他の犠牲となることなくして、与え合うことができたのである。……これこそ、彼らの英知と連帯の永遠なる秘密の一つである。」(396)

・「民族、階層、家族、個人は裕福になることはできるであろうが、円卓騎士団のように、彼らとその共通の富の周囲に座ることができるときにはじめて幸福になりうるのである。善、幸福とはいかなるものかと遠くに探し求める必要はない。それは、課された平和の中に、公共のための労働と個人のための労働とが交叉する律動の中に、また、蓄積され、ついで分配される富の中に、さらに、教育によりもたらされる相互的な尊敬と互酬的な寛容の中に存在するはずである。」(397)→「公共精神」という倫理の要請。